

「スポーツ少年少女の SAIGAI 防衛隊」

プロローグ ナレーション①

東日本大震災が発生したのち、田鍵さんは、宮城で活動している古くからの知人テコンドー選手をたずねて南三陸町に向かった。まだ震災から二ヶ月と少ししかたっていない2011年5月末のことである。

沿岸部に近づき、すべてがなぎ倒され流され、学校の校舎だけがポツンと残された光景を見て愕然とした。

幸いなことに知人は津波被害から難を逃れて無事であった。幸運を喜びつつ、現地道場だけでなく地域全体の子供たちの精神的なストレスの問題がとても気になった。

それから少し経ったあと、東京の教え子たちを東北道場にスポーツ交流へと行かせた。彼らは、南三陸町や女川町など震災の傷跡を視察し、石巻市の語り部たちから被災地の生の声も聞いた。

登場人物

田鍵さん（東京都町田市のテコンドー道場の館長。偉い人）

真白さん（東京都町田市の若手テコンドー選手）

赤堀くん（子供1…元気がある子）

青谷くん（子供2…頭がいい子）

桃井さん（子供3…やさしい子）

テレビ局（地元のケーブルテレビ局）

シーン1 スポーツ交流の帰りのバス

ナレーション②

仙台市内から東京までバスで五時間ほどかかる。みんなの目には、町全体がごっそりと津波で流されてしまった景色が焼きついている。道場で出会った同年代の子供たちの姿も。何かできないか。

赤堀くん「なんかすごかったな。」

桃井さん「津波で家が全部無かった。木も電柱も。」

赤堀くん「燃えた車が山積みになってた。」

青谷くん「女川町ではビルが倒れていた。」

赤堀くん「道場で一緒に練習した子達は、あの景色の中で生活しているんだな。」

桃井さん「私たちよりもちっちゃな子たちが練習がんばってたね。」

少しの間、無言。

赤堀くん「町田は大丈夫なのかな？ 関東でも大地震があるってニュースで言ってたし。」

青谷くん「町田に帰って、僕たちの町の中でも何かできないかな？」

桃井さん「なにかしたい。」

赤堀くん「なにかしたいな。」

青谷くん「なにができるんだろう・・・」

バスは東京に向かって走り続ける。

シーン2 道場での練習が終わった帰り道

ナレーション③

夕方の町田市。いつもの練習が終わり、彼らは駅までの坂道を歩いていた。東北から帰ってきてから思いついたことを色々話し出す。

赤堀くん「やっぱり俺たち、武道をしているんだから、みんなを守るべきだと思うんだ。

防衛隊だ。」

青谷くん「守るって言ったって、地震から守るのは子供の力じゃむずかしいかも。」

赤堀くん「町田の大人たちにも協力してもらおう必要はあるな。」

桃井さん「東北の道場の時みたいに、家族や同級生とかみんなが集まるだけでも少しは元

気になると思う。みんなが参加できる何かがいいんじゃないかな？」

青谷くん「まずは今度のテコンドー大会の時に、東北の話をみんなに知ってもらおうのはど

うかな？ 家族とかも来るし。」

赤堀くん「うーん。明日、真白さんに相談してみようか。」

シーン3 町田市テコンドー大会

ナレーション④

その意見は、町田市テコンドー大会で実現された。会場の体育館では壁際をぐるりと囲み、地域を守る防災・防犯にかかわる人たちが、東北被災地の現状を伝えたり、地域の安全を守るグッズなどを紹介している。大会を観戦に来た家族の人たちも興味を持って見て

シーン4 指導員たちとミーティングで新年からの目標を語り合う

ナレーション⑤

大会は無事に終了。今後も、日常から何かできないかと大人たちに相談してみる。

赤堀くん「でも、子供でもできることってなんだろう。」

青谷くん「石巻市の語り部さんたちが町の説明をされていたように、僕たちも自分の町の

ことを調べて良く知って、いろんな人に伝えたらどうかかな？」

桃井さん「友達も誘って、散歩気分楽しく町を歩きながら見て回るのはどうかな？ ピ

クニックみたいな感じで。」

真白さん「じゃあ、我々も、自分たちの町を改めて歩いて巡ってみようか。そこで発見し

たことをみんなに知らせてあげるのはどうかな？」

田鍵さん「それはいいね。大人じゃわからない子供の目線で気づいた危険なことや、安全な場所をみんなで一緒になって話し合うと、いろんなことがわかってくると思う。

真白さんを隊長に任命するから、ぜひやってみよう。」

エピソード ナレーション⑥

そして、自分たちが町を守るために、その町を「よく知り」「よく巡り」「人に伝えよう」と、町歩きマップの作成へと彼らは動き始める。

地域を守れるのは、結局は自分たちなのです。なにことも起こらない平和な時間が続くと忘れがちですが。

さあ。みなさんも、自分の町を守るために立ち上がってみませんか。